

琉球弧宮古諸島に視る古層の環世界

——女性是集落の生い立ちを抱いた——

奥濱 幸子（沖縄女性史家）

はじめに

琉球弧は黒潮に沿って連なる島嶼群で、日本社会の政治・経済の動向に影響を受けながらさまざまに価値観を変え、その大小によらず、独自の文化圏を形成している。その文化の基層にある集落祭祀は、島々の経済活動による生活様式の変化や、担い手の高齢化あるいは減少といった事情を反映し、簡素化や消滅を余議なくされた。島々のこうした事情は必ずしも同じではなく、都市部からの物資の流入量や情報の伝播速度などに異なりが視られる。

宮古諸島は、日本列島から遠く離れているばかりか沖縄島からもおよそ300kmの距離にあり、近代化に向かいながらも辺境性を維持したことで、集落ごとの祭祀が息づいてきた。古琉球の民族祭祀では、自らが生まれ育った土地の祖神ないし根神を信仰の対象にする。これらの点で、宮古諸島は、その「神性」のありように触れることができる空間と視得る。

琉球弧の島々が近代性を獲得してきたように、宮古諸島にもまた近代化が見られる。とはいえ、祖神を信仰の対象として暮らし、現代まで継承されてきた祭祀が形作る集落空間は、近代化の波に洗われる島空間と同時空に存在する。琉球国(尚真王)は、一五世紀末の「祭政一致」政策により、宗教を制度化し確立したと言われる。宮古諸島の祭祀は、この公的な宗教性と古琉球の信仰とが分離し難い形状を成して、独自の信仰世界を確立した。

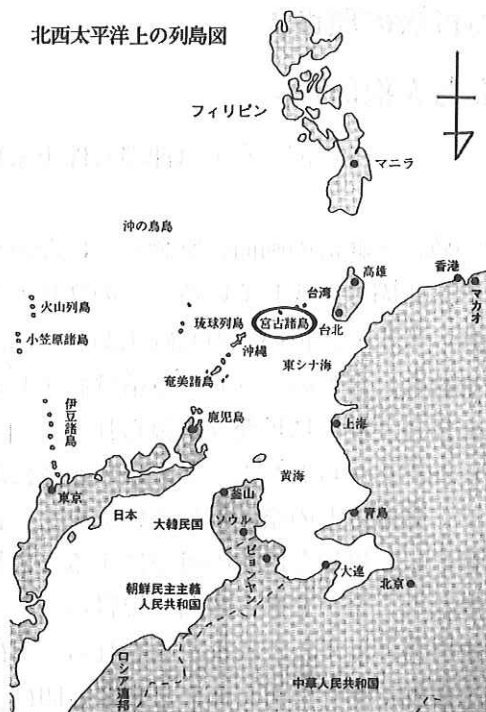
古琉球のムラやシマには、根神ないし根人に対する信仰がある。本稿では、宮古諸島の集落立て神話(祖神)を根源とする神性を、これと同質な神観念と位置づけ、神代から人の世に至る時間軸を宮古諸島における古層とした。そして、王府の定めた公的な宗教性が、宮古諸島の古層にどのように影響して、今日的な集落の信仰生活を形成するに至ったかということと、祭礼を執行する側に生まれて集落(スマとも言う)の神性を抱き、その領分を生き貫いた女性とについて述べていく。

1. 琉球弧宮古島の古層性

宮古諸島の先史時代について考古学的な解明は成されていない。しかし、先住者の発生については、航海中の遭難事故での漂着や流刑によって、この地での生活を余儀なくされ、珊瑚礁の洞窟に身を寄せて魚介類を糧にする生活様式があったというのが、一般的な見解であろう。やがて、先住者は雨水湧水を利用した農耕を始め、洞窟を出て丘陵の中腹に定住し、マキョ・マキ・フグと呼ばれる血縁集団を形成するに至ったと考えられている。

『平良市史(1979年)第一巻 通史編I』は、『元史(1317年)』中の波羅公管下密牙古人によるシンガポールとの交易記事が、文字による宮古史のスタート地点としている。そこで、

北西太平洋上の列島図



宮古諸島から北方を臨む

それ以前の宮古島については、各集落のシマ立て神話ないし伝承の研究が不可欠となる。宮古諸島の各集落で、祖先から子孫へと継承された多様な祭礼群は、文字を獲得し難い立場の人々が記録した生活史であり、古文書的モチーフに成り得る生きた資料でもある。この立場から視ると、琉球弧の中でも、宮古島北端に位置する狩俣（世帯数 288 戸、人口 657 人、平成 23 年 12 月現在）には、集落の古層性を示す特徴が多く見られる。列举すると、

- ① 海辺に流れ込む湧水の井泉がある。
- ② 遠浅の珊瑚礁で囲まれている。
- ③ 集落の背景に森(杜)がある。
- ④ 集落民は女神による集落立て由来譚を抱いている。
- ⑤ 他の集落に比べ御嶽やイビ(拝所)の数が多い。
- ⑥ 同祖集団・元家制による祭場がある。

- ⑦ 集落の出入り口を示す石門が在る。
- ⑧ 集落内は碁盤目状になっており、同祖の家々が一方向に並んでいる。
- ⑨ 集落の創生神話や実在する個々の歴史が神の神謡として祭礼で詠み継がれている。
- ⑩ 1946 年創設の購買組合があり、集落内の経済活動の中心を成している。

などで、①～③については、先住者が、飲料水とする湧水(泉)と、食糧の採取が可能な珊瑚の浅瀬と、居住可能な森(丘陵)環境とを集落立ての必要条件とした結果、狩俣の北海岸に面した土地を相応としたということであろう。実際、北海岸に位置する長浜に沿ってイヌグァー(湧水)が在り、

その背後には、天然のタブ・アコウ・クロヨナなどの常緑広葉樹に覆われた丘陵があり、創始者が居住したと伝承される大國杜や中国杜と呼ばれる森(杜)になっている。④の集落立て由来譚については、祖神祭の儀式を通して集落民に口承伝承されてきた。有史時代の始まりや血脈の由来に関わる祖神は、その神性をもって現在の住民と繋がり、動かしてはいけない魂の秩序を形成している。⑤～⑩は、この神性を基礎にした狩俣共同体での生き方を反映し



戦後に創設された
狩俣購買組合 2000年

た事象ということができる。

○女神に抱かれた狩侯の集落

狩侯では、旧暦(陰暦)1月～12月までの期間に、およそ六十余りの集落祭祀が執り行われてきた。祖神と子孫の血縁紐帯に基づいて、御嶽や国柱・集落エリアの海や畑地・井泉などに、集落民の無病息災と豊漁や豊穰の祈願である。中でも、集落生みの女神を祖神とした祖神祭は、集落祭祀の座標軸の原点となり、「第二回・イダス(新たな祖神が誕生する祭礼)」と「第四回・トウディアギイ(すべての祖神祭を閉じるために神を崇拜して送る祭礼)」の際、大城元の万座にてンマ(母親)である祖神を崇拜して、「母ヌ神ヌ神謡(1節～45節)」が詠み上げられた。神ヌ神謡のフサは、『古事記』中に見る青人草や人草と同様に、人の総称としての草と視られる。よって、母ヌ神ヌ神謡は、ひとりの女神がどのようにして狩侯の地に辿り着いて集落生みに至ったかを、時系列に沿って詠み上げた物語である。一方、祭礼を継承する集落民やそれを執行する神女たちにとっては、子孫として物語を辿ることで、魂が母ヌ神と一つに結び合うことになる。

大城元の万座で筆者が録音した「母ヌ神ヌ神謡(1996年12月16日)」と、1997年まで最高神女を務めていた伊良部マツさん(大正14年生)からの聞き取りによる「神女が抱く集落立て由来譚」との二つを合わせ、狩侯の集落立て神話として以下に示す。

↑
場面は
祖神の
神話
(女神世の
発生)

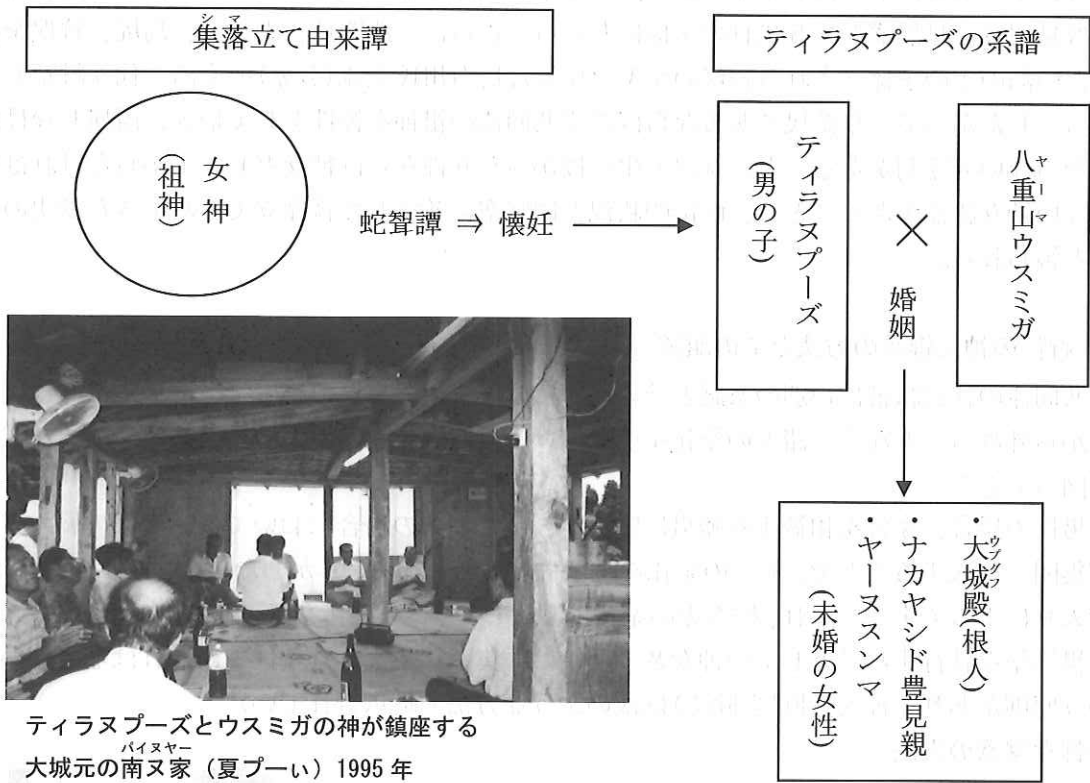
穏やかに百神を崇拜します、根立て主、マキヤの主であるわたしは・・・
母ヌ神である・・・崇高なる神・・・。そして・・・
これは忘れていけないことである。

始めに、祖神は田原地(地名)に降臨した(現在の大浦集落東方にある)。
この時、母ヌ神は山のフシライ(娘)を伴って
神の世から降りて来られたようだ。
神の地に降り、湧水を探しカナギガーを見つけた。

しかし、この水は水量が多いものの
口にすると味が良くないので、
頭に荷を載せ野山を越え越えて
次の泉となるクルギガーを見つけた。
この水を口に含んで見ると味は良い。しかし水量が少ない。
再び野山を越え越えてヤマダガーを見つけた。

・水量は多いが、海と繋がっているので味が良くない。
・再度、野山を越え越えて大変な苦勞をして島頂上に辿り着いた。
・磯地に下り磯ガーを見つけた。
・水量は少ないが美味しい水なので、そこで住むことにした・・・ここが大国柱だ。

伝承に基づく系譜を、以下に図示した。



○母ヌ神ヌ世 (祖神) から人の世 (根人) へ : 各元家の発生

上記の系譜図で示したように、大城殿はティラヌプーズの嫡男として生まれ、後の大城元家の創成者となる。大城真玉との間に七人の子を授かり、人の世を形成した。また、大城殿は、集落立ての条件にあった磯ガーとは別に後ヌカーの開掘者で、鉄や斧などを取り入れた人物とも言われている。暮らしの単位としてのマキョまたはフグで、安定した食糧自給ができるようになり、人口(子孫)が増加し、血縁集団が次第に力を得て自立していく過程が、このような伝承から想起できよう。母ヌ神を根神に据え、ティラヌプーズを経て大城殿を根人とする大城元家体制は、それ以前に存在したと言われる根間村の居住者、または有志嶺付近にあったと言い伝えられる漂流者の集団、アープガー付近の集団など、少なくとも三ヶ所のマキョを併合して成立したと考えられる。以上のことから、同祖祭祀集団の四元家(大城、仲間、志立、仲嶺)の要の位置に大城元家があるのは不自然なことではない。マキヤフグの名称が邑ヤスマ(シマ)などへと変化する状況があり、祖神を信仰する集落社会が宮古における中央集権的な政治体制の影響を受けながら、次第に体系化されていった祭礼の一つが祖神祭であろう。

狩侯の政治的な流れについては、『宮古島記事仕次』に述べられている。宮古の争乱期に

において与那覇原軍に勝利した目黒盛の孫にあたる普佐盛が、先妻の死後に狩俣村から後添えを迎えて二女を授かったという。また、1500年に琉球王府から宮古島の頭に任ぜられた仲宗根豊見親は、目黒盛から5代目の子孫にあたる。さらに、池間島、大神島、島尻、狩俣を治めた四島の主の子孫とされる狩俣のマヤ(屋号)は、白川氏支流(分家)の家譜を代々継承している。したがって、集落民であるならば必ず共同体の祖神を神性として抱き、所属しなければならない元家制があること、狩俣で生を授かった女性ならば神女として上がらなければならない神女組織があることも、政治的状況と同時空に並行して秩序立てられてきた歴史の事象と視られる。

2. 狩俣の神女継承の方法とその組織

共同体の社会紐帯は戸別の系譜とその起源にまで遡る。集落の神女や他の神役たちは、そこから外れることなく、諸々の祭礼を引き継いで祖神祭を掌る。集落では、その円滑な継承を図ってきた。

男性の場合、家督を相続する嫡男に限らず、婿入り婚の場合においても、生家の属する元家集団へ参入することで、その祭礼を継承することになる。しかしながら、女性の場合は、嫁入りによって生家を離れ、嫁ぎ先の系譜に参入し、その祭礼を継承しなければならない。

祖神祭を執行する者としての神女及び神役は、集落に生まれた女性でなければならないという原則があり、神女(神役を除く)は次のような方法で継承されていた。

○神女継承の方法

① 嫁継ぎ

代々祖神を務める根家に嫁いだ女性は、祖神になることが条件になっていた。すなわち、姑から嫁へと伝達するのが嫁継ぎで、根家には祖神祭の衣装となる祖神衣(材質は芭蕉布)、黒の着物、イツンミーと呼ぶ彩取りの布などがある。姑は嫁が祖神となって巣立つ日までそれらを神櫃にしまい、家族の目に触れない場所で保管していたと聞く。また、家の者の留守を見計らい、時々それを手入れしたようだが、男性の視線に当てない配慮をしたようだ。時期がくると、嫁は姑が先代から継承したそれらの品を賜る。

注：集落では、祭礼の祖神祭についてウヤーンと呼称する。他に神女、神衣、個々の祖先についてもウヤーンと呼ぶ。

② フツ選イ儀式

「二月の巡回(旧暦二月)」で執り行われるこの儀式では、集落の祭礼に関与する男女の



ウヤーン
祖神祭 1994年

ウヤーン
根家に嫁ぐ女性は祖神衣を継承する。

神役たちが、集落外に居住する神を憑依させる不可視の能力を持つ者(神憑依人)を尋ねる。そして、この一年間に執り行った諸々の祭礼について怠りはなかったか、また、神女や神役にはどの干支の者が相応しいかなど、第三者としての判断を仰ぐ。祭礼の執行者以外の判事(神憑依人)によって神女候補者の干支が上がり、神女及び神役らは干支に符号する者の人選を行い、祭場の大城元家において神の託宣を拝聴する「フヅ選イ」の儀式を経て、神から選ばれた者の氏名が確定される。それを踏まえ、祖神女や神役たちは、氏名の確定した神女候補者の家を訪ね、「フヅ選イ」の結果について神から託宣されたことを告知する。

①の「嫁継ぎ」については、1996年に二人の祖神が誕生し、それが最終年となっている。②の「フヅ選イ儀式」については、神女候補者本人の承諾が得られず、1997年の最高神女の退任以降、新たな祖神(新祖神)は祭場へ上っていない。いずれの場合も、神女候補者となった女性がそれを承諾すると、自らの干支と符合する女性＝マウヌンマを背景に、己の真ん中に鎮座する神「マウ」を抱く儀式を行う。また、祖神女と継承者は互いに連絡を取り合い、家族の留守を見計らって祭礼の内容や神謡の詠み合せ、神座における立ち居振る舞い、祖神衣の着用の仕方、祖神祭の秘儀性についてまでも教示を受け、「祖神祭の二回目：イダス」で新祖神として山へ上る。祖神との婚姻儀礼(祖神祭三回目：スマバイウヤーンの戌の日に座で祝宴をする)を一連の通過儀礼の最後として、祖神を神性として抱く神女の資格を得て、集落の祭礼を執行する立場となる。

○狩侯の神女組織

宮古諸島に視られる各集落の神女組織は、「フヅ選イ」の儀式によって祭礼全体を掌る最高神女＝大母(字佐良浜)または大母(来間島)と呼称される神女を選出し、その他の神役たちについては、神女間の話し合いによって承認されるシステムが採られている。一方、狩侯では神女として集落の神性を抱くまでのプロセスが厳粛で、より丁寧に執行されてきた。このようなシステムは、多くの神謡で詠まれるように、「昔の力のまま、根立てのまま」、すなわち昔から変わることのない儀礼儀式を踏襲するようという神女間で暗黙の裡に了解された秩序観に由る。狩侯では、各祭祀、各元家における神女の配列や配置に、それが反映されている。

狩侯の祭祀集団である元家は九つあり、そのうち大城元は集落の創成神を、仲間元は航海安全の神や旅映えの神を、志立て元は五穀豊穰の世ヌ神を、仲嶺元は水ヌ神を祭神とし、これらを四元と称している。祭祀は旧暦4月～9月までを夏の祭礼、旧暦10月～3月を冬の祭礼としている。夏の祭場は四元の他にカニヤー、イツカフ、新城元なども加わり、各元家とそれに付随する南ヌ家(男性の祭場)で祭礼が執行された。しかし、四元以外のイスカフや新城元は、子孫の減少とともに、集落祭祀が開鎖される2006年以前から機能しなくなっていた。また、祖神祭に開かれる大城元、北ヌ家元、前ヌ家元は、冬の祭場として設定されている。神女組織では、夏と冬の祭礼によっても、嫁いだ先の元や神女の地位によっても、配列配置

が変わる。

以下に、夏の祭礼である夏ブーイ(粟の豊年祭)の神女組織と、冬の祭礼である祖神祭の神女組織について述べる。

註：本稿では、祖神の象徴である草冠^{ウイカ}を賜る女性を神女、それに由らない大ツカサ(司)以下の女性を神役と呼称する。また、祭礼に携わる男性については神役の名称を記す。

夏の祭礼における 神女組織

例：大城元（女性の祭場）

祭神=創成神であるンマティダとアサティダとアマテラスの神

- ・家ヌ主母（ティラヌプーズの娘）→ 大城元を管轄する神役。
- ・アブンマ → 集落の最高神女であり、大城元の祖神女。
- ・ウパラジ → 座（北ヌ御嶽の遥拝機能を持つ拝所）の祖神女。
- ・大和ンマ → 大和イビ(外来神)を管轄する神役。
- ・島ヌ主 → クバラパーズのイビ(拝所)を管轄する神役。
- ・ウイカ主 → 学問座を管轄する神役。
- ・佐事 → 祭祀のさいの雑用をする神役。



大城元の夏ブーイ 1995年

例：大城元の南ヌ家^{バイヌキ}(男性の祭場)

祭神=ティラヌプーズと妻のウスミガ

- ・日取りヌ主 → 祭祀の日程を選び、最高神女に報告をする。
- ・アーク主(2人) → 男性の神謡を管轄する神役(ニールやピャーシなどを詠む)
- ・佐事の主 → 大城元に属する家庭から祭礼に用いる粟に代表される穀類などを杵として集める神役。
- ・ニウの主 → 神酒の柄杓を管轄する神役(祭場での接待)。
- ・ポーザ → 賄いをする神役。
- ・水ブー → 水を管轄する神役。



供物の用意をするポーザ役

大城元・南ヌ家 1995年

冬の祭礼における神女組織

狩俣のウヤーン=祖神祭は冬の祭礼で、集落の神性の中心を成す。大神島や島尻では、こ

れをウヤガンと呼称している。この祭礼は、大神島、島尻、狩俣の三ヶ所のみ視られたもので、大神島が旧暦6月から、島尻や狩俣では旧暦10月～12月の間5回に亘り執り行われていた。

狩俣の祖神祭の祭場である大城元、前ヌ家元、北ヌ家元は、神女及び神役らの籠り家ともなり、^{ウヤガン}祖神衣があるので男性立ち入り禁止の崇高な祭場となっていた。冬の元では四元それぞれの神女及び神役について、以下のような配置が視られた。図1～3は、長年に亘り祖神女を務め2006年に退任された久貝マツ(昭和5年生)さんからの聞き取りと筆者の記録とに基づいて作成した。

各元の神女組織と神座の配置図

大城元(夏の祭礼における神女組織)で示した神女及び神役以外の神名と役職について(左上段から)

註:家ヌ主ンマ、ウバラズについては大城元(女性の祭場)の例を参照

- ・カニヤーツカサ → 鍛冶を掌るカニヤ一元の祖神女
- ・大ツカサ → 祖神と子孫の間を繋ぐ神役
- ・スバアギ → 祖神祭の先導役・厄祓い神役
- ・神名の無い祖神 → 根家を継承する嫁継ぎ祖神
- ・磯ンマ → 磯の神を掌る神役(磯イビの管轄)
- ・車ンマ → 滑車の神を掌る神役(車イビの管轄)
- ・ウイヌピャー → 豆の神を掌る神役(ウイヌピャーイビを管轄)
- ・トウマ → 祖神の供役(祖神祭のみの神役)
- ・フサヌ主 → 神謡を掌る神女

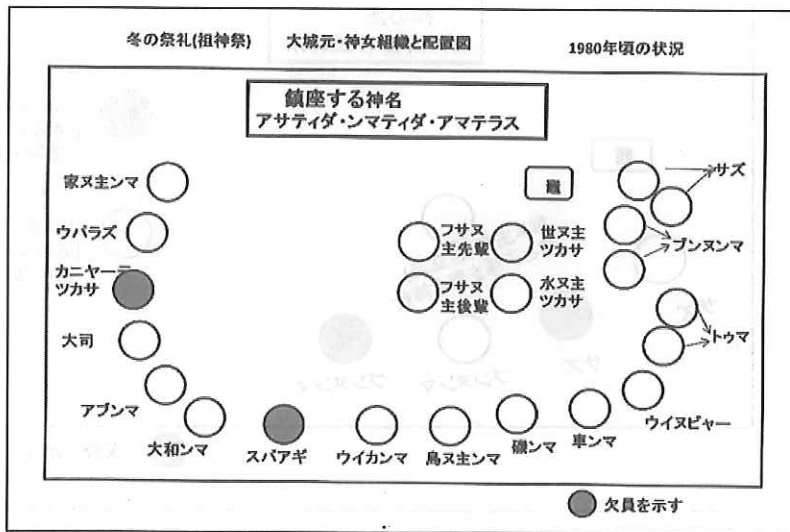


図1: 大城元

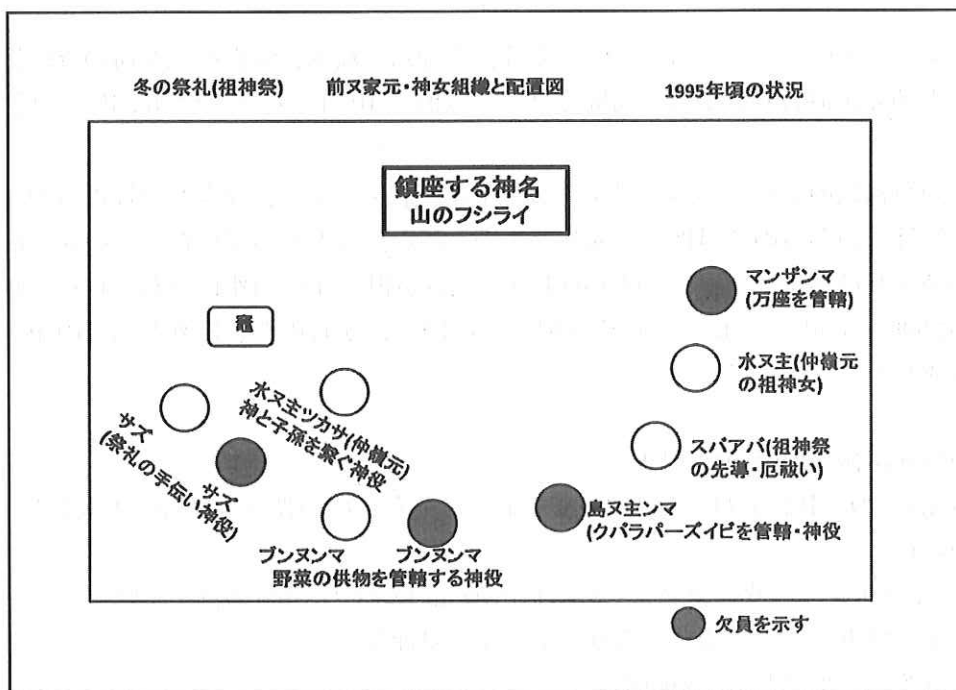


図 2 : 前ヌ家元

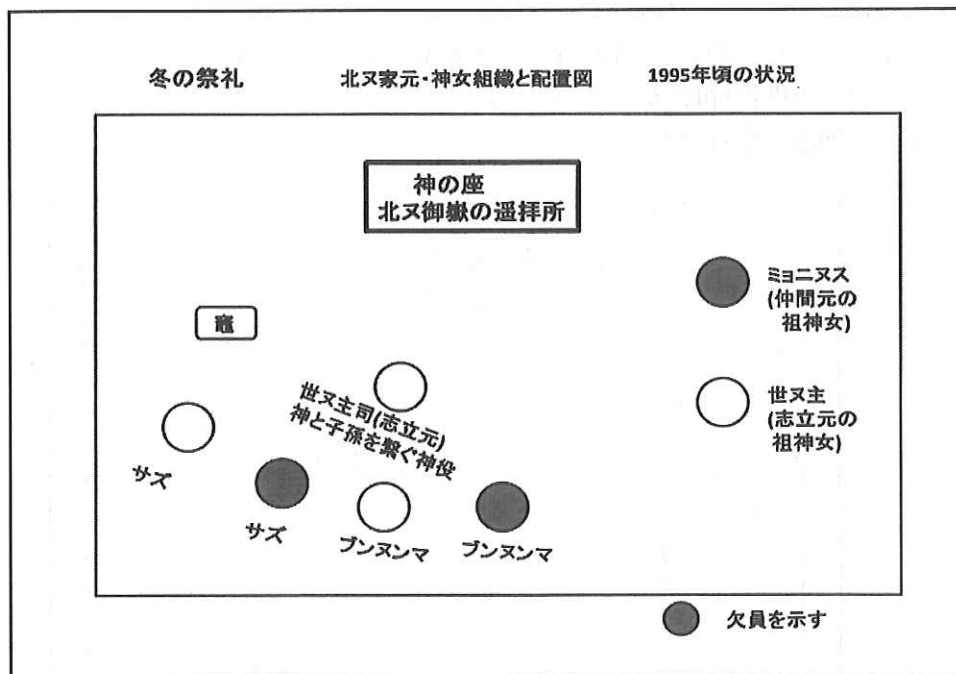


図 3 : 北ヌ家元

図1～3に示した神女組織からは、以下のような集落祭祀の歴史を推察することができよう。図1の大城元では、他の二つの元に比べて神女や神役の多いことが分かる。理由としては、祖神祭そのものが集落立て由来譚を背景にした祭礼であること、また、同系統と言われるカニヤー元と新城元の祖神女や、分家した子孫たちの繁栄により、その家元である大城元に子孫の豊饒をもたらしたことが挙げられる。祖神祭は、集落生みの女神ンマティダを祖神にして、大城殿を根人とした祭祀であると言えよう。

○祖神祭と神名の無い祖神^{ウヤーン}

「2. 狩侯の神女継承の方法とその組織 ①嫁継ぎ」で、根家から嫁継ぎをした祖神^{ウヤーン}の立場について説明した。図1では、神格の高さや神役の性質などによって配置に序列があることが分かる。大城元では、嫁継ぎによる祖神は後方に配置され、他の祖神及び神役らが前方に鎮座している。つまり、嫁継ぎによる祖神は、神名を持たずに祭礼に参加し、役割から外された扱い方が視られる。

祖神祭五回目「トウディアギ（神を崇拝し送る最終の儀礼）」の三日目。祖神たちは、山に在る北ヌ御嶽を出て「ユークイ」の場所（ズムィ嶺）に赴く。祖神女及び神役の配列を1995年旧暦12月5日（ひのえ・申）の記録に基づき作成した。神名を持たない祖神については、以下のようであった。

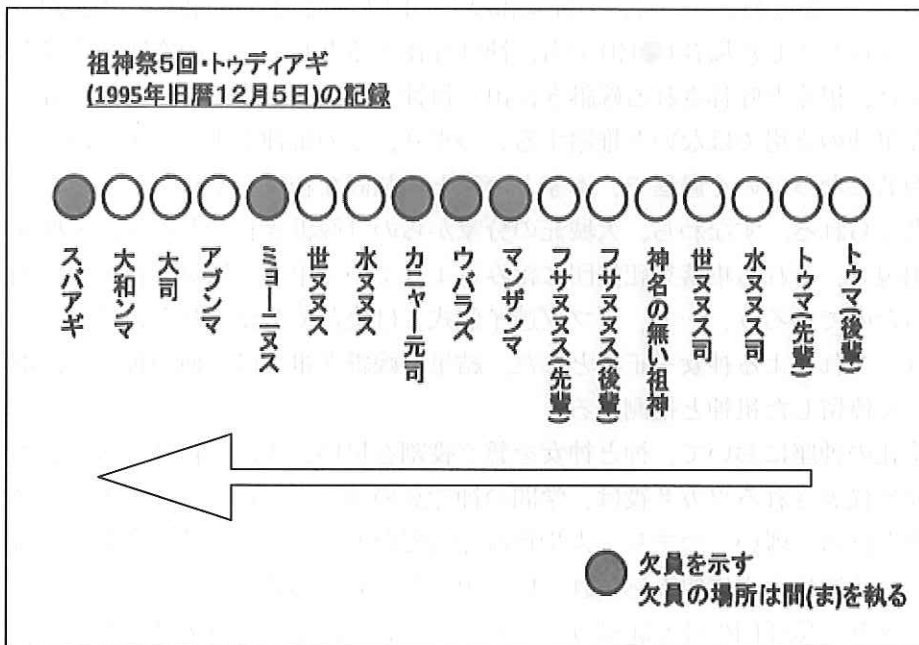


図4：祖神女及び神役の配列順

○祖神祭と外来神

図1~4で、各元の祖神女となる祖神は、神を表す象徴として草冠を賜るが、家ヌ主ンマ、大ツカサ、大和ンマ、ウイカンマ、島ヌ主ンマ、磯ンマ、車ンマ、ウイヌピヤー、トウマ、ブンヌンマ、サズ、世ヌ主ツカサ、水ヌ主ツカサなどの神役らは、それには当たらない。大和ンマとは、大城元に鎮座するアマテラス神や大和イビを管轄する神役である。ここで言う天照神とは『古事記』中に見る女神：天照大御神を表わし天皇家の最高神、すなわち太陽神と同質な神と考えられる。しかし、集落では、後に設定されたと視られる外来神を象徴した大和神ともなる。



定められた順に並んだ祖神と神役たち 1995年

上述のように、集落祭祀は各元の祖神女及びその配下にある神役らによって執り行われてきた。そこには、それぞれが掌る神の領分へ立ち入ってはいけないという、神座における暗黙の掟があった。例えば、「○狩俣の神女組織」の図1~4における祖神祭の神座では、神女及び神役に欠員が生じた場合(●印)でも、神は存在するとして、その空間を空けたままにしていた。また、根家と呼称される嫁継ぎに由る祖神では、神女組織への参入は許可されているが正式な祖神の立場ではないと推察する。つまり、この祖神を生んだ根家は、マキあるいはフグが顕著になっていく過程で、本家と分家との強固な結束を不可欠とした結果、発生したものと考えられる。すなわち、大城元の分家からの「嫁継ぎ」であろう。大城元に由らない元家も出現し、それも集落祭祀集団に組み込まれていく中で、嫁継ぎ祖神の序列が今日のようなようになったのであろう。一方、「フヅ選イ儀式」は集落で公認された祖神選出の方法として継承され、これによる神女を正統とした。結果、嫁継ぎ祖神は、他の神役とは別の形式的な存在として停留した祖神と推測する。

また、祭礼の神座において、神と神女を繋ぐ役割を担い、また、祖神女らの補佐役ともなる大ツカサに代表されるツカサ役は、学問の神や豆の神といった、生活の中から必然的に生まれた神役とは考え難い。つまり、人や物流や情報などによって集落が外部と交流し、あるいは宮古の政治機構の中に組み込まれていく中で発生した神役と視る。ツカサとは、祖神の神性とは異なり、琉球国の神女組織「大アムシラレ」に由来するツカサと考えられる。

3. 狩俣の神女組織と宮古の大阿母制

「狩俣に生まれた女性」であることを執行者の条件とする集落祭祀は、大城元を根人に据え

集落立て由来譚を真理として多くの神女を生み、祖神から連なる神性を祖神祭に反映させた。しかしながら、宮古島の狭小な集落で生まれた民族信仰も琉球国による祭政一致(尚真王代)政策と不可分なものではなかったろう。

琉球国は、王のおなり神としての三十三君のうちの最高の神職である聞得大君を頂点として、各ムラやシマの根神信仰を配下にした神女組織：大アムシラレ(「アム」母の意を「シラレ」は治める意)を配置し、政治と宗教を一体化した祭祀制度を体系づけた。大アムは、真壁大アムシラレ、首里大アムシラレ、儀保大アムシラレの上級女神官三人が三平等に分かれ、各間切や各ムラ、島々にはノロクモイの女神官が置かれた。

琉球国は、1500年「仲宗根豊見親玄雅ハ、英雄豪傑ニシテ」と八重山の赤蜂征伐の功績を称えられ宮古島の頭職に仲宗根豊見親を取り立て、妻の宇津免嘉を大阿母に任命した。大阿母は地方女神官の上級神官であり、真壁大アムシラレの配下に置かれ、^{ウツチアム}掟阿母一人、^{サズアム}仕事阿母一人がつけられ、一石五斗、免夫男四人、女四人が役俸として与えられた。大阿母は、宮古の創生神話を抱いた張水御嶽を中心に、各集落16カ所の御嶽にツカサを置き、首里天加志(琉球王)のための祈願や航海安全の祈願、二月の麦初穂祭、四月の米粟御祭、九月の世の為御たかべ、十月の火用心御たかべの祭礼を執行する位置にあった。現在でも張水御嶽がツカサヤーと呼称されるのはそれに起因するものであろう。また、大阿母には琉球国への入観慶賀の義務があり1500年に上国、以下は3年に一度の入観慶賀が義務化された。しかし、1655年からは呼び出し次第のみ上国することになり、以後「聖上女官の航海遠来を軫念ス。」として入観慶賀を免じ、代理の者のみの上国と変化した。

航海遠来について、宮古の「仲屋まぼなり」は、宮中からの帰路、船が遭難して多良間島で悲惨な死を遂げた女性と伝えられている。また琉球国による入観慶賀の義務について奄美諸島



ノロクモイに与えられたという勾玉
首里大アムシラレの配下にあった大宜味村・田湊にて(1995年)



狩侯の最高神女と大ツカサは井泉祈願終了の報告にツカサヤーへ赴く。1995年



オアンシャレの伝承を抱く
奄美諸島の与路島 1998年

の与路島には次のような伝承がある。オアンシャレ(大アムの意)は姪を伴って入観慶賀へ行くが、側室になるのを拒んだ姪が役人に毒殺されてしまい、与路島の岬に近づく船から姪の亡骸とともに身を投げたという。

琉球国による祭祀制度は、羽地朝秀(尚象賢)の改革(一七世紀後半)で国王の祭祀の制限や簡素化などが行われ、十八世紀前半には蔡温による女神官の重要な祭祀などが廃止された。聞得大君の地位を必ずしも優位としない政治の変容期を向かえ、1879年(明治12年)の廃藩置県を経て、「ノロクモイ 大阿母等ハ廃止シ拜所ノ管理者ニ採用スルコト」とされ、1884年には聞得大君や他の上級女神官の公的制度は廃止された。このような琉球社会の変遷から、狩俣の神女組織に見られるツカサは、同祖集団の祖神を背景にした神女や他の神役とは神性が異なり、琉球国の祭祀制度から発生した公的立場の神官職であったと考えられる。また、ツカサは神役として各元に付随しているが、大城元のみ大ツカサと呼称される。したがって、この^{ムト}元家は宮古の政治体制及び琉球国の宗教的支配を享受した祭場と視られる。言い換えれば、秩序化された神女組織は、内外の政治体制によって公的な体系づけが計られて序列化されたと言える。



現存するツカサダー(字下地棚根)。かつては田んぼだった。旧砂川間切宮国村の所有地とされ、宮国集落は年一度清掃を行う。 1995年



ツカサダーの祈願
宮古島字上野宮国の神役らは、湧水の泉(イスウガー)の方向へ祈る。琉球国の祭祀制度や稲作発祥に由来する田と視られる。 1995年

奄美諸島以南に位置する琉球文化圏の島々は、琉球国の祭政一致政策による中央集権体制を享受した。その図式は宮古諸島でも例外ではなく、宮古島の頭職に執り立てられた仲宗根豊見親やその妻の宇津免嘉にも称号が与えられたことに言及すれば、宮古島自らが国王の支配下にあることを志望したとも言える。しかし、それはあくまで政治的な動向であって、信仰の対象を集落立ての祖神とする集落祭祀の体制が琉球国によって組織化されたわけではない。島人は政治的に矛盾が生じない範囲で国の支配を受け止める一方、集落の神性が第一義の同祖集団による、古琉球的な独自の信仰世界を確立した。狩俣集落が抱えてきた祭祀及び神女組織は、その表象と言えるであろう。

おわりに

上記のように、狩俣には集落の創生神話及びそれに由来する神謡、祭場となる元、女性を中心とする神女組織といった古層が根付いている。最高神女以下神役たちは、祖神女たちから伝承された“昔の力”を真理として年間の祭礼を繰り返し、共同体をその神性で満たし、豊饒に導くことを女性の筋道とした。

集落の神女及び神役たちは集落から公認された神人であり、個人の意思に由らず、生を享受した集落の神女組織の一員に組みこまれた。そして、御嶽の夜籠りや神謡を覚え詠み、日常の現実から離れた修行を通して神性を抱くようになった。集落の神女組織の中での修行によって神性を獲得した神女及び神役たちは、組織を退いた後、集落内の個人的な神事に関与する「子孫を抱く」立場が与えられ、あくまでも集落の範疇でその生命を完結する。

各地の御嶽を巡礼して修行を重ね、神を抱くという点においては、神憑依人やユタも同質と言えるが、組織に由らず個人の修業によるという点では、集落の神女及び神役たちとは異なる立場の者である。こうした女性の精神的、経済的な負担は少なくないと聞く。「神を見た」「神が見える」という言葉の概念についても、共同体の神性を抱く神女のそれと、組織を背景としない個人から生まれた神とでは、その神性にも異なりがあらう。

○神女継承の方法②フヅ選イ儀式で、「二月の巡回（旧暦二月）」で、神女候補者を選ぶさいに、集落外に住む神憑依人の判事を得る儀式があることを述べた。以前は、集落にいた神性の深い祖神女たちによって協議され、判事がなされたことであろう。しかしながら、祭礼に関与する者の意識が外に向いたことで、集落がこうした女性を生み難くなったことなどから、神憑依人に判事を委ねるようになったと推察される。

“琉球孤において女性は神になる。”善し悪しはともかくとして、宮古諸島の地理的位置は、他者の侵入を長年拒み続け、狭小な集落空間を墨守する辺境性を生み、古層を抱く女性文化を形成してきた。集落の風土は、島人の無意識層に在る神観念を養い充足させる空間であった。集落の女性は、祖神とつながることを生命の抛り所にし、その不可視の靈力を維持充実させる装置としての集落祭祀を怠らなかつた。また一方で、神憑依人ないしユタといった女性たちをも生み出した。

古層では、集落の生い立ち(神話)を抱き、その神性によって集落を抱くことを女性のジェンダーとした。



祭礼・祝いのウプナー(旧一月十八日)

村番所の所踏み 1995年

祖神女や神役たちは集落の秩序と平安を祈願し、土地を踏み鎮める所踏みをする。



祭礼・祝いのウプナー(旧一月十八日)

座のクイチャー 1995年

座とは、母ヌ神が鎮座する北ヌ御嶽の遥拝所。

祖神女たちは、連帯することで古層の環世界を維持してきた。



最後の祖神祭=大城元での儀礼

2006年1月(五回目のトゥディアギ)

- 右側→ 祖神
- 中央→ 祖先祭のお供役
- 左側→ 大ツカサ

今年(2012年)は1972年の日本復帰から40年目になる。復帰前後の宮古諸島では、各集落でも本土資本による土地の買い占めが発生し、島の海岸沿いの土地が観光地への活用を目的に、そのターゲットとなった。狩俣にも同様な問題が上がった。狩俣の神女たちは、何度も繰り返す御嶽での夜籠りを通じて連帯を編み、姉妹よりも強い信頼を結んだと口を揃える。神女たちは、売却に賛同する集落の男性らを尻目に、海岸沿いの土地が神の土地であると主張して同意せず、売却交渉を立ち消えにしたという。また、伊良部島佐良浜の神女たちが口承する言葉に、「神の力は後の力、人の力は若力」がある。神の力は時間を経過して後に効力を発揮するが、人の力は即く効力を発揮するという意味で用い、それを信条として神女を務めてきた。しかし、大和世への移行とともに、人の力は、歴史あるものに思慮するよりも経済活動を優先し、動力によって自然に負荷を与え続けている。古層の文化を担ってきた女性の意識もそこを離れた。

近代人としての宮古人は、多様な情報と夥しい物質の中に身を置く暮らし方を選択した。日本の中央から海流を超えて主流の文化が運び込まれる一方で、宮古独自の文化は希釈されていく。グローバル化されない島だったからこそ、個々の位置が明確に浮上した。近代化を

優先した日本社会は、経済優先のあまり何か忘れ物をしてはいないか。2011年3月11日の東日本大震災及び福島県原発事故以降、島のあり方が新たに問われている。

謝辞

論考は、主に狩俣の神女や神役からの聞き取りと筆者の祭礼記録ノートに基づいています。文献から零れた生活の滴には、風土に根差した集落のリアルな営みが感じられます。琉球弧の島々を歩く中で多くの方々にお世話になりました。そして今なお、狩俣の神女経験者の方々には聞き取り調査でご教示いただいております。この場をお借りして、御礼申し上げます。

参考文献・参考資料

- 宮城栄昌、1967、『沖縄女性史』沖縄タイムス出版部
仲松弥秀、1975、『琉球孤の村落探求-2- 加計呂麻島 与路島 請島(記録ノート)』。
平良市史編さん委員会、1976、『平良市史』第一巻 通史編 I (先史～近代)、
平良市教育委員会。
外間守善・新里幸昭編、1978、『南島歌謡大成 III宮古篇』角川書店。
宮城栄昌、1979、『沖縄ノロの研究』、吉川弘文館。
平良市史編さん委員会、1981、『平良市史』第三巻 資料編 I (前近代)、
平良市教育委員会。
島尻政長、1992、『宮古大阿母の継承』『宮古研究第6号』宮古郷土史研究会。
佐々木伸一、1993、『ウプアムその後 ーツカサヤの祭祀をめぐるー』
南島史学会第四十一号。
伊波普猷、2000、『沖縄女性史』、平凡社。
奥濱幸子、2002、『狩俣の祭祀継承の深層と現状』、『沖縄文化研究二十八号』、
法政大学沖縄文化研究所。
三浦佑之、2003、『口語訳 古事記』、文藝春秋。
川満信一、2004、『宮古歴史物語』、沖縄タイムス社。
奥濱幸子、2004、『第六章 宮古島・狩俣に見る近代と古層』
野村伸一編『東アジアの女神信仰と女性生活』慶應義塾大学出版会。
後田多敦、2009、『琉球の国家祭祀制度』、出版舎 Mugen。
奥濱幸子、2010、『集落生みの女神・その由来譚』『宮古研究第11号』宮古郷土史研究会。